日本山海名物圖會

三

日光膳椀
下野国日光山江戸より三十一里あり此所より出る
椀膳黒地にてつよし雑用に備りありとて
法人賞翫する也○心越禅師題詩　刀鋸剛出方圓器
膠漆塗来金玉光分与世間通貨宝太平風雨拜君王

仙臺馬市（せんだいうまいち）

毎年三月上旬より四月中旬まで仙臺芭蕉（ばせを）の辻から国分町上中下町と三所に分ちて一日がハりに立る市の始と云ふ市はじまりて七日ハ江府の寮より支使来りて江相を撰む其次ハ国司の乗る小荷駄を撰む其後ハ朝より暮七ツ時迄を限りて売買市にのりたるをとり来れハ買主これを見て仲買に[illegible]してそのひの[illegible]定むる也仲買たる者を牙郷（すあひ）してそのひの乗下を定め売買するのことゝ

越前福井石橋

橋なかばハ石にてつくりなかばハ木にてつくれり是ゆゑ奇觀なり橋づめに當國の名物とて蓑笠と賣る商人あり○凡石橋ちいさきハ諸國にあれ共かくのごとくなるハまれ也京三條の大橋ハ橋杭を石にてせらるゝを太閤の命にて増田右衛門尉長盛に命じてわたらしむ則ぎぼしの上に銘あり又甲州に奇異の石橋あり徂徠先生の峡中紀行にみえたり

越前奉書紙

奉書余国よりも出れども越前に及ぶはなし
越前奉書紙ハ品多し・大广・中广・小广・奉書(かみまさ)
・間政(あいまさ)・上判・間草(まくさ)・雲草(うんくさ)・判(にと)・外口・大高・中た・小引
・つや出し・雲紙・丈長(たけなが)・色はあひ・鳥の子・薄やう・中やう
いづれも紙の性よくつやありてつよし凡日本より紙多く出る中にも
越前奉書漉ハふとし冥東の西ノ内稲(かど)村といふ所漉出す紙を上品とし

讃岐平家蟹

蟹の甲に目鼻口ありて人の面のごとし俗説に平家の一門讃岐の国八嶋の浦にて源九郎義経にせめほろぼされ怨念かにとなるとて平家蟹といふ異説には此蟹の形清盛に似たり摂州尼崎に武文蟹と云あり秦の武文が怨霊なりと云又浮村蟹といふあり是は長門にハ清経蟹と云皆俗説なり中華にも鬼蟹といへるは此類なり

池田炭(いけだすミ)

摂州池田炭ハ一倉(ひとくら)と云里にて櫟(くぬぎ)にてやきて池田に常に出ス炭竃ハ地をほりて土にてむろを造り前に口をあけ櫟をつミ入てやくやきかげんを見てふさくところありふさかざれハ炭損じてあしく又早くふさげバふすぼりてけしこかくふさくのかげん大事なり饒炭諸国より多く出といへとも池田を冣(さい)上とス

住吉浦汐干（すみよしうらしほひ）
三月朔日ころ今十日比まで大汐にてしほ多し　なかにも三月三日ハ
汐干とて貴賤群集するゆへ堺住吉浦ハ三里ばかりひがたと
なりて遊の男女潟（かた）によりて蛤をとる又所の人ハ多く入て見物の人々にも売あり
すべて汐干ハ入海の所ハ何方も同し　すなはち始ハ堺浦住吉浦の汐干よりそれより
尼崎浦の汐干まで西海まて貝類をとること自然に江戸にても品川の汐干
めざやかなり此浦よりハ比目（ひらめ）魚多くして塩のさまつよく見物の人入れてたのしみとす

堺庖丁

泉州堺の津山上文珠四郎庖丁鍛冶の名人也正銘
是なりと云刃金のきゝよく切あぢ格別よし出刃
薄刃指身庖丁まな箸たばこ庖丁何れも皆名物也○荘子にいはく
庖丁解牛 庖丁は料理人の名也古人つかひそめし刃物なれば
とてつゐに庖丁を刃物の名とはせしならし何人かさしはじめしやらんされ
故あることよりて名付そめけん今は俗に通じてまたひろまり侍り

江戸浅草紫菜（あさくさのり）

此のりハ武州品川の海に生ず品川の町にて製しうるを
品川のりと云浅草のりハ品川にて之をうるを浅草にて
製して売る也浅草のり仕上ヶ宜しくきようにして名物となる下総の
葛西（かさい）のり出雲の十六島（うつぷるい）皆名物也紫菜より多く出る又紫菜と云
又甘苔（あまのり）と云もの駿州富士川より出るを富士のりと云下野日光山の川より
出るを日光のりと云肥後の菊池川より出るを菊池のり同国水前寺のり何れも河のり也

京西陣織屋

京都にて織出る織物多し 功者にて唐織にまけず
中にも紗二重ハもろこしにもまさりてこまやか也ふかく

大紋 緞子 繻珍 金襴 縮緬 紗綾 綸子 繻子 毛織
紋縮 光綾 茶宇 光絹 竜紋 熨斗目 天鵞絨 紬
絽、紗 茶丸 白呂 兜羅綿 行色 縮 絵絹 絹紬

高機
金紗今織の類ハ此機にて織る也 空引とて上の方にて地紋をあやどるあり

漆製法（うるしのせいほう）

漆の木に鎌にて切目をつくれバ其切目より汁わき出るを竹へらにてこそげ取てこそげ入るゝつゝ桶に茱の油をさしせんじ汁を入る也此油を加えて其上へ漆をこそげいるれバ漆やけずしてよしといへり生漆を取るハ盛夏にて新しき木ハ汁多し又播州の老木もよし　和州吉野紀州熊野よりも出る此を本漆と云漆木よりおろし此木の実ハ取て蝋にする也

摂州平野飴

大坂天王寺の東平野町より出る飴名物也風味よし小児にも用ひて毒なし薬地黄煎あり○飴の製法ハもち米を上こ八めしにむし米一斗よくの一升のつもりにて右の強めしとまぜよくつけ置大麦のもやしの粉米一斗に六合のつもりを入て右のめし此上にふりかけ拵まてよくつきませ翌日布袋に入てしぼり釜に入てわらかに火をたき練りつめるなり練りあらためるハ赤みかありつめるを地黄煎といふ

天王寺干蕪

摂州東成郡天王寺村内かぶらの名産にて百姓おほくかぶらを植て冬まであるとも市に出し然し当秋かぶらとも申して葉を霜月より正月までの間ハ竹垣をこしらへて葉とともに干又は其味は冬春といふあいだ当干蕪と出す是は今世のかぶら丸く天王寺ハかぶら細長し是は今世ハ天王寺かぶらに及ばず

豊後河太郎（ぶんごのかはたらう）

形五六歳の小児のごとく遍身（へんしん）に毛ありて猿に似て眼するどし常に濱邊へ出て相撲（すまふ）をとれく人と迎ふることあしされども力あるもくれバ水の中に飛入て時ゞして行へはそろつさて水中へ引入てころ人を殺すその河太郎と云 相撲をとれさる人ハたとへ勝ても正気を失ひ大病をうくると云ふ是れ抹香（まつかう）を多く其のましむれバ正気になると云 河太郎ハ豊後国に多し其外九州の中所々にある也 関東にてハ河童（かはたらう）と云

大坂瓦屋町瓦師

大坂東かたは西かたの地より土性よし
瓦をやきて色うるはしくつよし古へ仁徳天王の
旧都にて宮きやうのかはりてそれがそのかはら武の陶どもは
雑ひよりとよませあふたかの頃まで今も瓦やの縄さへ瓦職し
聖徳太子天王寺建立の時も此地の土をとらせて瓦となさし
すへとく此所の瓦日本第一上まて諸国の寺院よも皆此瓦を用ひらる

塩浜

海辺の鹵地をけづり能ならして平らならしめ海より
うしほをくみてこれへまきかけよく日にかはかしてそれへ
まてうえあつしよくされたる時桶へいれてうへよりくみて
釜にうつして松葉にてたく〳〵海より汐をとくむ皆女の所作
なりあるひは男よりて桶をうけて汐を塩浜へいれもあり
諸国海辺より多く塩出るといへとも摂州赤穂の塩を名物とす

薩摩大隅黒砂糖

甘蔗と云草俗よ砂糖黍と云茎ハ竹よ似て葉ハ黍よ似たり実なし古根ゟ苗を生じ此汁をしぼりとりてよくたきくだきて鍋へ入つめ石灰を加へてかきまぜよく煮て黒砂糖とす此所百姓多くこれをつくりて年貢よ納む菓子など製するハ皆これを用ゆ唐より来る黒砂糖よりハ色も黒く味同じ唐ゟ来て白砂糖氷砂糖とてあるを皆此草之日本ふてハ黒のみハ白ハ不出来

晒蝋（さらしらふ）

蝋ハ黄櫨（はじ）の木の実也蒸籠（せいろう）にてむしたくらうし
臼にてつき蝋とる薩摩ノ国筑後ノ国奥州会津ホ
よりおほく出る外諸国にもあり又唐よりわたる也
さらし蝋ハ糸太抜にて右の黄蝋をさらして白蝋となせ